

令和4年度 原子力産業基盤強化事業（安全性向上を担う
人材の育成事業）
（課題名：原子力緊急時に備えるリスク・コミュニケーター育成事業）

ご報告 資料

令和5年2月14日
公益財団法人 原子力安全技術センター

目次

1. 令和4年度 本研修事業の概要
2. 研修種別と目標
3. 基礎編
4. 実践編
5. 令和3年度成果の集約
6. 令和4年度「実践編」成果の速報
7. 出口戦略の検討

1. 令和4年度 本研修事業の概要

1. 事業名：資源エネルギー庁 公募型

令和4年度原子力産業基盤強化事業（安全性向上を担う人材の育成事業）
（課題名：原子力緊急時に備えるリスク・コミュニケーター育成事業）

2. 事業目的

福島第一原発事故を踏まえて拡大された原子力災害対策重点区域に、新たに含まれることになった外部ステークホルダーとのシビアアクシデントを想定したリスク・コミュニケーションに関わっているか、これから関わろうとしている方々（原子力分野以外の人材一般も育成対象とする）を対象に、リスク・コミュニケーションに必要なカリキュラムを作成し、研修を継続実施（平成30年度から継続、5年目）することにより、その能力を備えた人材を育成することを目的とする。

3. 事業内容

本事業は「軽水炉安全技術・人材ロードマップ（平成29年3月改訂）」及び「原子力の自主的安全性向上の取組の改善に向けた提言（平成27年5月）」に基づいて遂行されるもので、人材育成のニーズの一つとして「リスク分析やリスク管理及び外部ステークホルダーとの原子力災害を想定したリスク・コミュニケーションを実施する能力を備えた人材の育成」が求められており、当センターはその一環として「原子力緊急時に備えるリスク・コミュニケーター育成研修」を継続実施（平成30年度から継続）する。

現在の全国的な新型コロナ対策を鑑み、令和2年度から人材育成を戦略的・効果的に進めていくために研修のWeb化を提案・実施した。令和3年度はより高度なWebシステムへと改良して研修実施しており、令和4年度は研修実施とともに、出口戦略の一環として既存のWebコミュニケーション・ツールを活用する会議体機能を含んだリスク・コミュニケーターのプール構想も具現化する。

令和3年度から研修種別を2つに分けた。令和2年度までの従来の研修を「基礎編」と位置づけし、令和3年度から新たに「実践編」を立ち上げた。令和4年度の研修は、ZOOMリアルタイム形式による「実践編」を計2回開催する。

「基礎編」の目標は、放射線生物学や社会心理学に基づく科学的知識の習得、及び臨床心理学に基づく1対1での信頼性（ラポール）の形成法の習得にあった。一方、「実践編」の目標は、産業・組織心理学に基づくステークホルダーの情報の受け取り方の理解、及び社会心理学分野の実学に基づく合意形成に向けたアプローチの力量の向上にある。

4. 実施期間

令和4年9月28日～令和5年2月28日まで

取組の経緯

	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度以降～
育成目標	科学的知識、及び1対1での信頼性(ラポール)の形成法の習得		実学の習得に基づく合意形成に向けたアプローチの力量の向上			出口戦略の検討
◆研修名称	最新の社会心理学的知見を取り入れたリスク・コミュニケーター育成研修		原子力緊急時の地域住民への対応に備えるための平時におけるリスク・コミュニケーター育成研修		原子力緊急時に備えるリスク・コミュニケーター育成研修	
◆受講料	無料 (国の支援アリ)					
◆研修形式	対面式	対面式	Web開発	Web改良	Web運用継続	
基礎編カリキュラムの変遷						
行程表	◆イントロダクション ◆福島第一原発事故対応	・本研修のコンセプト／1F事故を踏まえた原子力防災上の教訓と反映 1F事故の概要			出口戦略の検討	
	◆放射線生物学	・低線量放射線生物学の基礎知識 ・がんのゲノムに残された放射線の爪痕 (Radiation Signature) の発見				
	◆社会心理学の講義 社会心理学の演習	・リスク認知の仕組み／リスク・コミュニケーションの実践・成功事例 カルテットゲーム → クロスロードゲーム				
	◆臨床心理学の講義 臨床心理学の演習	・ラポール (信頼) の形成法とリスク・コミュニケーション グループワーク／ラポールを形成するための話の聴き方 (傾聴)				
実践編カリキュラムの変遷						
◆産業・組織心理学				ステークホルダーの情報の受け取り方		出口戦略の検討
◆実学 (危機管理)				危機管理対応時のリスク・コミュニケーション ～クライシス・コミュニケーション～		
◆実学 (SNS)				SNSを活用するコミュニケーション		
◆プランニング演習 (ゲーミング体験型)				バトルシップゲーム → 危機管理対応演習	リスク・コミュニケーション・プランニング	
リスク・コミュニケーターのプール構想 (会議体機能を含むコミュニティの場) の提供・運用						
					プール構想の提供・運用	出口戦略の検討
予算総額 (税込)	12百万円	9.6百万円	10百万円	9.2百万円	10百万円	出口戦略の検討
受講 [申込] 者数計 (アンケート有効回答数)	108名	114名	[153名] (53名)	[194名] (129名)	[81名] (58名)	

取組の背景

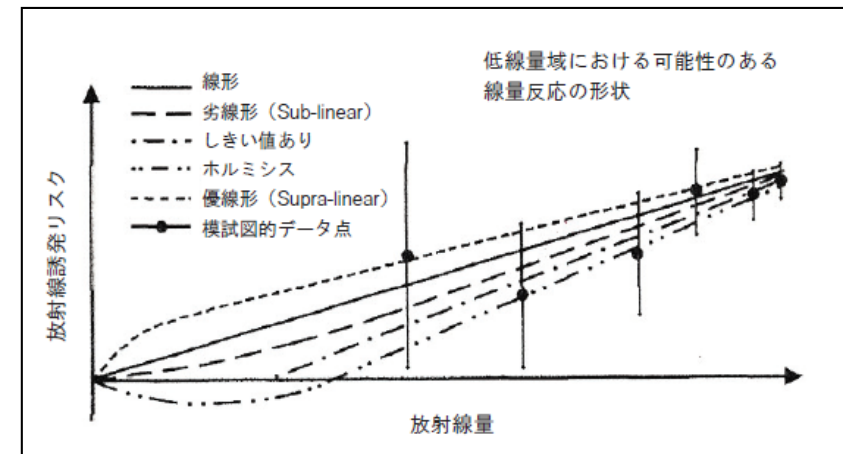
運転業務従事者への原子力災害時における業務従事に関するアンケート結果（新潟県の事例）

区分	対象者数 (配付数)	回収数	回収率	回答内訳						
				行く <small>下段：行くのうち 氏名も記入した者</small>		行かない		その他 (回答なし等)		
合計	1,982	1,335	67.4%	452	33.9%	876	65.6%	7	0.5%	
内訳	バス	707	649	91.8%	244	37.6%	399	61.5%	6	0.9%
					164	67.2%				
内訳	トラック	1,275	686	53.8%	208	30.3%	477	69.5%	1	0.1%
					172	82.7%				

- 被雇用者である業務従事者を対象にし、バス運転手707名のうち649名から返信（91.8%）があった。
- 設問「福島第一原発事故のような事故が起きた場合、住民が原則屋内退避しているような半径概ね30km圏内の区域において、屋内退避が困難となった住民を30km圏外に搬送する協力依頼があった場合、区域内へ行っていただけますか？」
- 返信のあったバス運転手のうち、399人（61.5%）が「行かない」と回答した。

新潟県ホームページ公開：平成28年10月4日閲覧
<http://www.pref.niigata.lg.jp/genshiryoku/1356853269630.html>

100mSv以下の線量-反応曲線



- 広島・長崎の原爆被爆生存者の疫学コホート調査では100mSv以下の急性外部被ばくによる発がんリスクの程度は、統計的に検出できない（Brenner,D, 2003）。そのため放射線専門家によるいかなる解釈も不確実性を伴い、断言できる証拠はない、とされている。
- 100mSv以下の低線量放射線被ばくによる確率的影響の過剰リスクを現す可能性のある線量-反応曲線は、図に示すように専門家集団内においても未だに論争がある（Jon D.Boice,Jr, 2017）のも事実である。

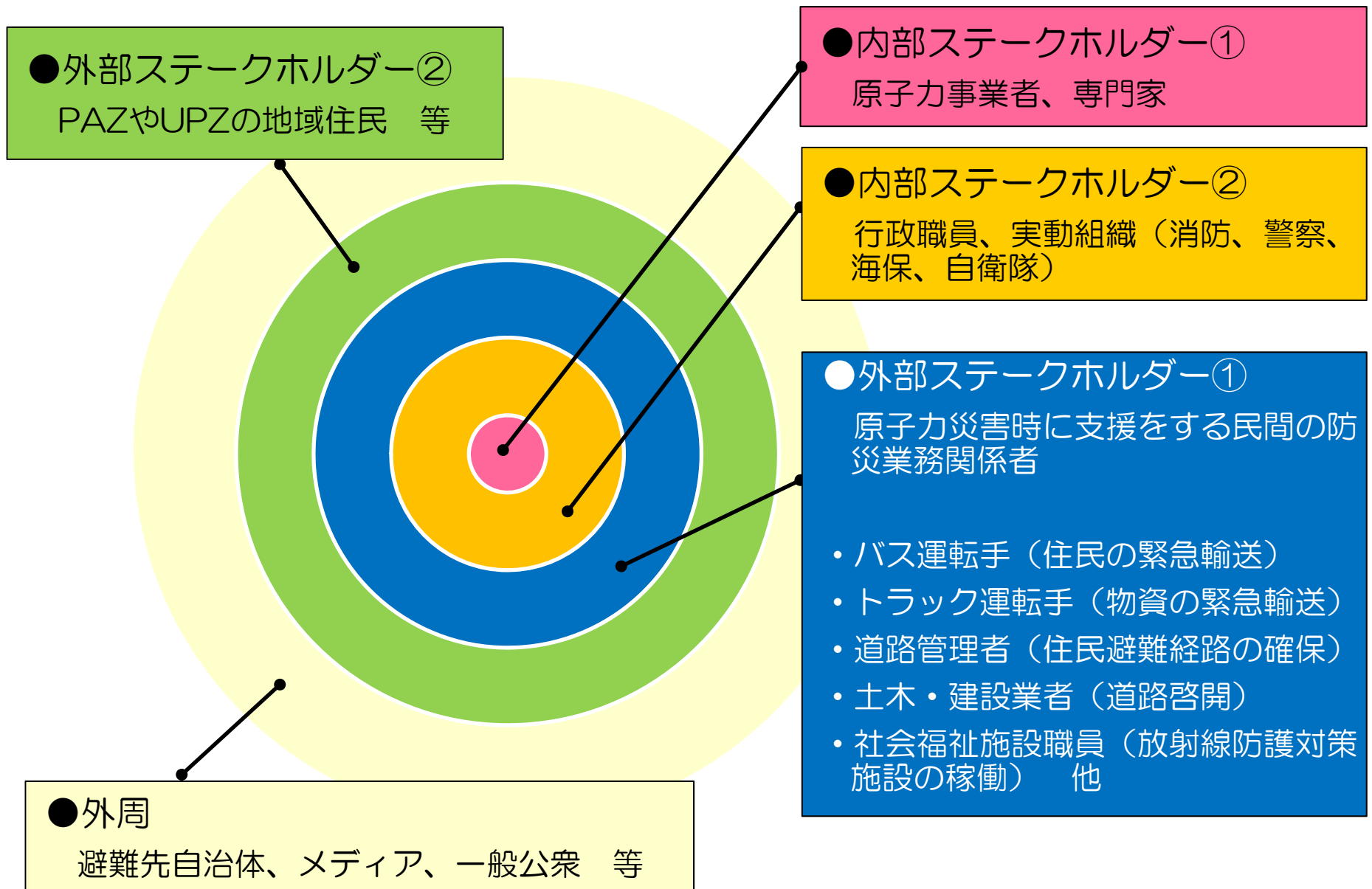
リスク・コミュニケーション (risk communication) とは「対象の持つ情報、特にリスクに関する情報を、当該リスクに関係する人びとに対して可能な限り開示し、たがいに共考することによって、問題解決に導く道筋を探す社会的技術」のことを言う。

(National Research Council, 1989 [木下富雄 訳])

本研修では、そのような社会的技術をもった人材の育成を進めていく。

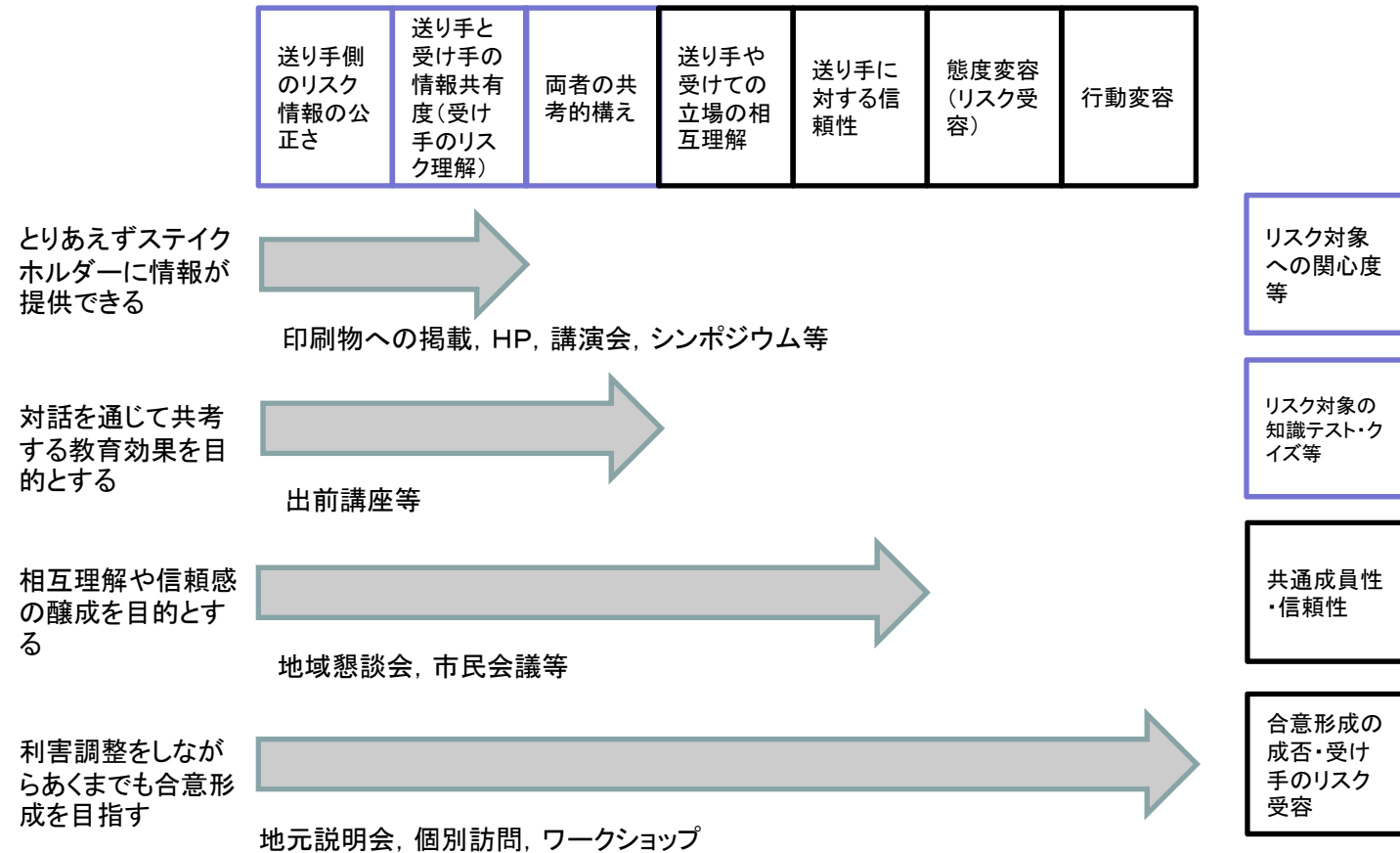
用語の定義

ここでいう「ステークホルダー」とは、被ばくする可能性のある住民を含めた関係者すべてをいう。



注：世木田が作成

2. 研修種別と目標



木下富雄(2008, 2009)をもとに、追手門学院大学 金川智恵が図表作成

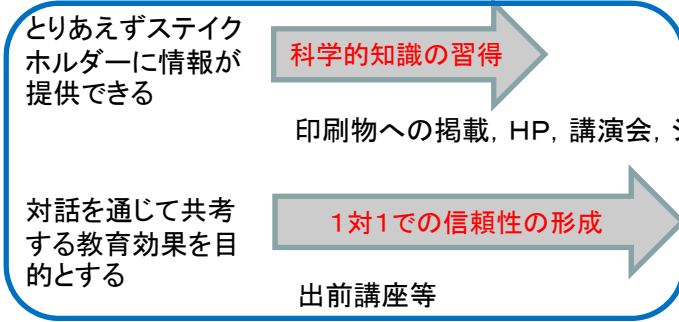
リスク・コミュニケーションのプロセス

リスク・コミュニケーター
育成研修の種別

送り手側のリスク情報の公正さ	送り手と受け手の情報共有度(受け手のリスク理解)	両者の共考的構え	送り手や受けての立場の相互理解	送り手に対する信頼性	態度変容(リスク受容)	行動変容
----------------	--------------------------	----------	-----------------	------------	-------------	------

基礎編

- ・平成30年度と令和元年度は対面式で開催済み
- ・令和2年度はWeb化して開催済み
- ・令和3年度はWebシステムを改良して開催

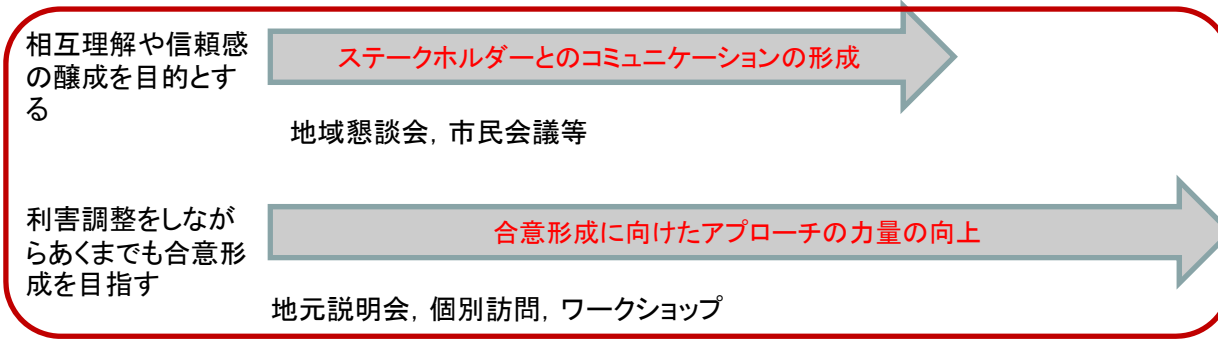


リスク対象への関心度等

リスク対象の知識テスト・クイズ等

実践編

- ・令和3年度は新規カリキュラムにより開催
- ・令和4年度は演習を改善して無償継続開催



共通成員性・信頼性

合意形成の成否・受け手のリスク受容

木下富雄(2008, 2009)をもとに、追手門学院大学 金川智恵が図表作成した資料を、世木田が改編

研修種別ごとの人材育成の目標

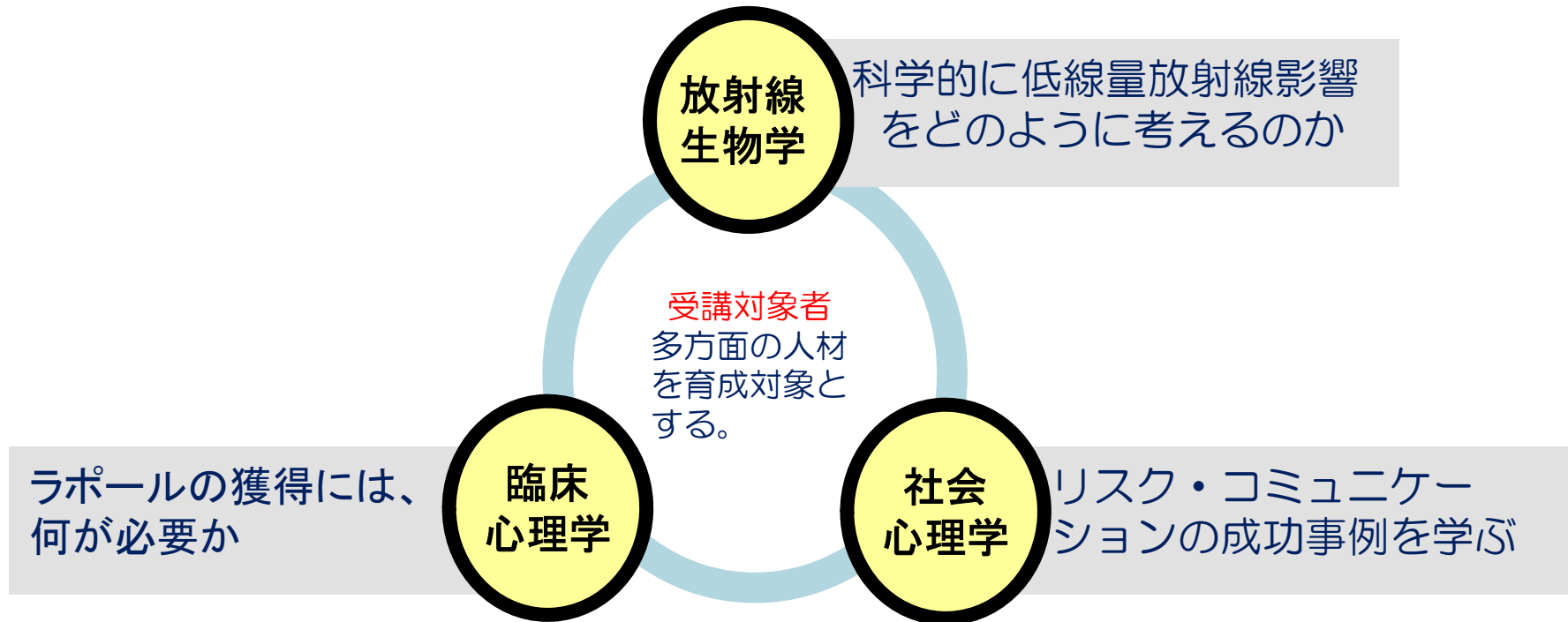
リスク・コミュニケーター研修に係る評価・講師連絡委員会（講師陣のご紹介）

順不同・敬称略（所属は令和5年2月現在）

	氏名	所属	専門分野と担当
委員	今岡達彦	量子科学技術研究開発機構 量子生命・医学部門 放射線医学研究所 放射線影響研究部 修飾要因・幹細胞研究グループ グループリーダー	放射線生物学 ・基礎編：講義1
//	飯塚大輔	量子科学技術研究開発機構 量子生命・医学部門 放射線医学研究所 放射線影響研究部 発がん動態研究グループ 研究統括	
//	堀口逸子	東京理科大学 薬学部 医療薬学教育研究支援センター 社会連携支援部門 教授	社会心理学&健康教育学 ・基礎編：講義2とCRG ・実践編：演習
//	岡田昌毅	筑波大学 人間系（心理学域）教授	臨床心理学
//	大塚泰正	筑波大学 人間系（心理学域）教授	・基礎編：講義3とGW
//	原 恵子	筑波大学 働く人への心理支援開発研究センター 准教授	産業・組織心理学 ・実践編：講義1
//	田崎陽典	TAZAKI コミュニケーションコンサルティング 代表	リスク管理（実学） ・実践編：講義2 ・実践編：演習
//	小野間良	株式会社 kiCk コミュニケーションプランナー	SNS情報戦略（実学） ・実践編：講義3

3. 基礎編

「基礎編」 以下3つの分野から構成



「基礎編」の構成（平成30年度～令和3年度まで開催）

Web形式でのカリキュラム例：オンデマンド配信受講とZOOMリアルタイム研修のハイブリッド型（計2回/年）

基礎編

- ・ZOOMリアルタイム研修 第1回 令和3年11月19日（金）午後 [定員70名]
第2回 令和3年12月5日（日）午後 [定員70名]

オンデマンド 配信受講	No.	形式	時間配分	題名	担当
	0	合同 講義	15分	・イントロダクション	・事務局
	1	合同 講義	90分	【放射線生物学】 ・低線量放射線被ばくと健康影響	・今岡委員 ・飯塚委員
	2-1	合同 講義	60分	【社会心理学】 ・リスク・コミュニケーションの実践（事例紹介）	・堀口委員
ZOOM リアルタイム 研修	No.	形式	時間配分	題名	担当
	—	通信 テスト	12:30-13:00 (30分)	・ZOOM接続テスト（受講者の参加は任意）	・事務局
	0	開始	13:00-13:05 (5分)	・研修の進め方と留意点	・事務局
	3	合同 講義	13:05-14:35 (90分)	【臨床心理学】 ・ラポール（信頼性）の形成法とリスク・コミュニケーション	・筑波大学
		演習		・聴き方（傾聴）に関するグループ・ワーク	
	—	休憩	(10分)		
	2-2	演習	14:45-15:45 (60分)	・リスク・コミュニケーション・トレーニング 「クロスロードゲーム」	・堀口委員
—	質疑 応答	15:45-16:00 (15分)	・オンデマンド講義に関する質疑応答	・今岡委員 ・飯塚委員 ・堀口委員	

1. 放射線健康影響の基礎（復習）

- 環境省：放射線による健康影響等に関する統一的な基礎資料から

2. 少し専門的な低線量放射線生物学

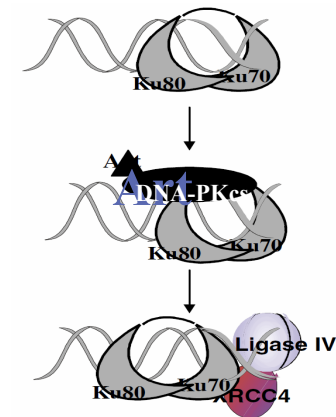
- LNT理論の基礎になる放射線生物学
- DNA二重鎖切断の修復機構など
- 未解明の現象：適応応答やバイスタンダー効果

3. 放射線疫学の基礎と最近のトピック

- ERR等の用語の意味と、疫学研究の信頼性
- 高自然放射線地域、小児CT、原子力作業員、原爆被爆者

4. がんのゲノムに残された放射線の爪痕

- Ptch1ヘテロ欠損マウスの研究 Tsuruoka et al. (2016) Radiat Res 186(4):407-414.
- ヒトでも放射線の爪痕が見つかった Behjati et al. Nat Commun (2016) 7:12605
- DNA解析法の進歩により、将来は放射線が作ったがんを識別できるようになるかもしれない。



古典的モデル

小さなリスクを過大視し、大きなリスクを過小視してしまう傾向

一次バイアス
モデル

2因子モデル

第1因子：恐ろしさ
第2因子：未知性

二重過程理論による修飾

2000年代以降のモデル

ヒューリスティックの
基盤となる二重過程理論

[経験的システム(システム1)]

- 素早く自動的、大雑把な判断
- 感情的、連想による直観
- イメージでの事態把握

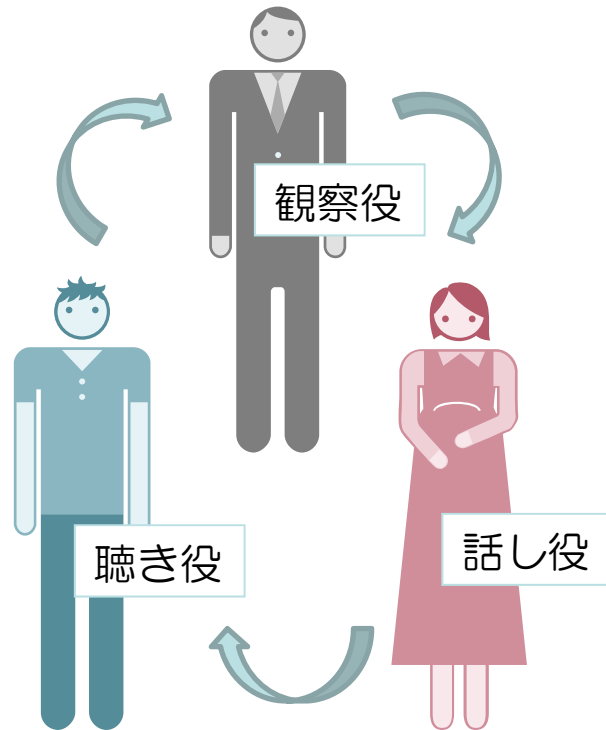
[分析的システム(システム2)]

- 時間を要し、意識的な思考
- 精緻な判断志向
- 理性的で論理に基づく評価
- 数値や統計量での事態把握

注：Slovic (2007) 他に基づき、世木田が作成

社会心理学～一般公衆におけるリスク認知モデルの変遷

- Active Listening（積極的傾聴）態度の向上を目指すロールプレイ。
- 傾聴（聴く力）とは、心理カウンセリングの基本となるスキルである。
- ルール
 - 1グループ3人とし、1名が話し役、1名が聴き役、1名が観察役（傍観者）となる。
 - 与えられたテーマに沿って、話し役が5～8分程度、話しをする。話が終わったら、聴き役と観察役が、各々1～2分程度で傾聴態度に関する感想を出し、最後に話し役が聴き役の傾聴態度を総括する。
 - 各々役割を交代し、3巡したら、ロールプレイを終了する。



各々の役目を交代し、3巡する。

グループ・ワークの風景
（平成30年度実績）



Group Work（GW）の概要：対面式でもWeb形式でも可能

- Gaming Simulation（ゲーミング・シミュレーション）のひとつで、QUARTETT Game（カルテット・ゲーム）と称する。
- カルテットは、8テーマ（日常生活、放射性物質、測定、有効利用、がん、リスク、不安、国の対応）各組4枚ずつ、計32枚のカードから構成される。
- ルール
 - 1グループ3～5人とし、カードをよくきって、全員に裏向にして全部のカードを配り、じゃんけんで最初のプレイヤーを決める。
 - プレイヤーは、メンバーの誰かを指名し、自分の必要なカード（例えば、「日常生活」の「自然放射線」）を1枚指定して、それを持っているかを訊ねる。
 - 訊ねられた人は、そのカードを持っていたら渡さなくてはならず、持っていないと嘘をつくことはできない。
 - カードがもらえたら場合は、続けてプレイでき、もらえなかった場合は、次のプレイヤーに交代する。
 - 手持ちのカードで4枚1組が揃ったら「カルテット」と言ってオープンにし、自分の前に置く。
 - 全員の手持ちのカードがなくなった時に、もっとも多くの組を集めたプレイヤーが勝ちとなる。



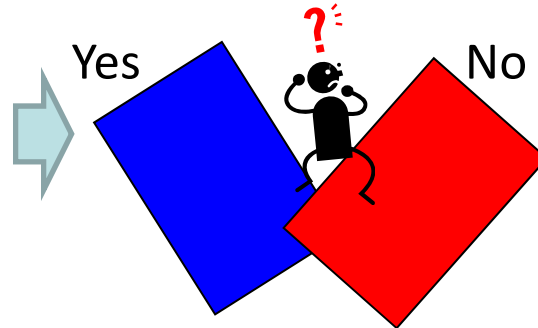
- Yamaguchi T, Horiguthi I. Radiation risk communication initiatives using the “Quartet Games” among elementary school children living in Fukushima Prefecture. Jpn. Health Hum. Ecol. 2021.87;6:274-285
- 平成24年度厚生労働科学研究費補助金 厚生労働科学特別研究事業 原発事故に伴う放射線に対する健康不安に対応するための保健医療福祉関係職種への支援に関する研究（研究代表者 櫻田尚樹 国立保健医療科学院生活環境部）分担研究

QUARTETT Game（カルテット・ゲーム）の概要：対面式のみ可能

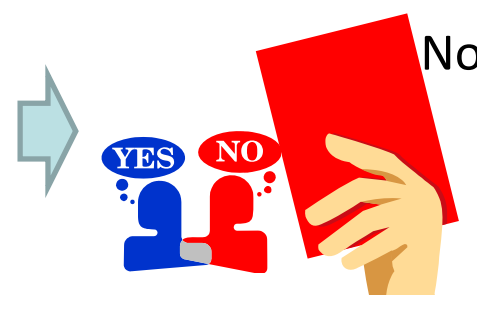
- ・阪神・淡路大震災のときの「実話」がもとになった全員参加型のリスク・コミュニケーションの教材で、正解のない問題への回答が特徴
- ・ZOOMなどでのリアルタイム・ゲームが可能
- ・クロスロード（Crossroad）とは：進路を決すべき「分かれ道」



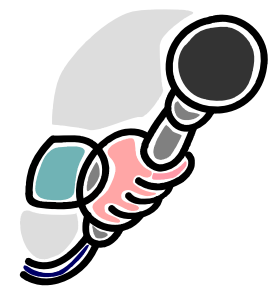
1 問題が読み上げられる。



2 YesかNoかーどうしよう



3 決断してカードを合図で一斉に挙げる



4 意見の表明(他者を否定してはいけません)

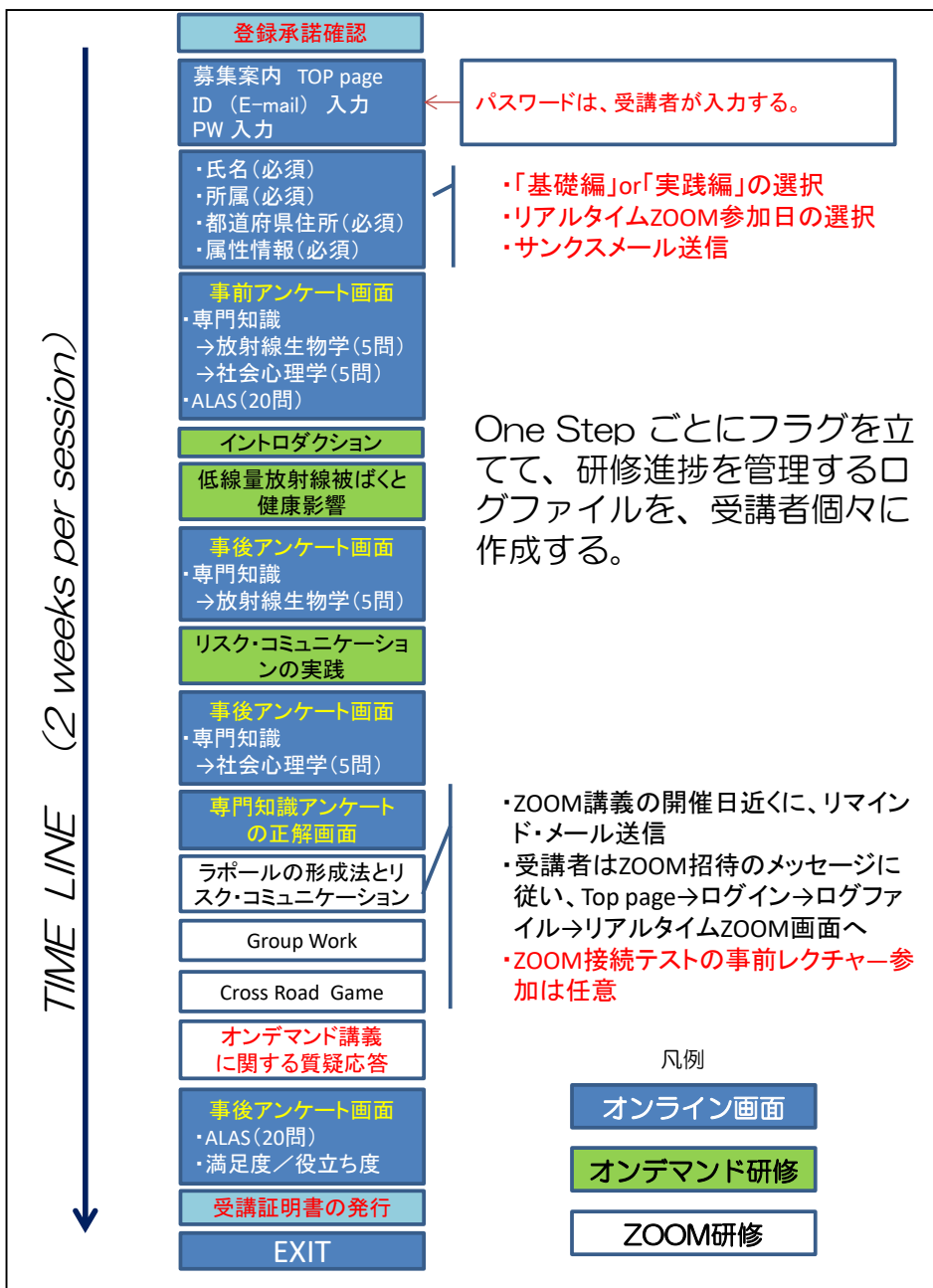


問題例：

「神戸編・一般編」では、「人数分用意できない緊急食料をそれでも配るか」、「学校教育の早期再開を犠牲にしても学校用地に仮設住宅を建てるか」、「事後に面倒が発生するかもしれないが、がれき処理を急ぐため分別せずに収集するか」など、神戸市職員が実際に迫られた難しい状況判断がカードとして出題される。

出典：内閣府 防災情報のページ 災害対応ゲーム教材「クロスロード」（原災への取組）
<https://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/torikumi/kth19005.html>

Cross Road Game (CRG) の概要：対面式でもWeb形式でも可能



基礎編Webシステムの改良

令和2年度「基礎編」の評価結果は、Webアンケートへの有効回答率が30%~40%と低く（~70%が無回答で、申込登録をしたものの、Webカリキュラムを履修しなかった人たち）、評価効果の解釈に困難性を与えた。無回答の多さは、アンケート回収方法の観点から、Webシステムに係る多くの改良点が洗い出された。

令和3年度「基礎編」のWebシステムの改良では、事業の継続的な改善を図る観点から、アンケート入力を必須化するとともに、オンデマンド視聴とZOOMオンライン研修への参加を必須とし、すべてのカリキュラムを受講しないと、受講証明書が発行されないシステムへと改良した。

結果、アンケートの有効回答率は、65.7%（34.3%は無回答）へと改善した。

基礎編（定員70人/回） 令和3年度成果

ZOOMリアルタイム参加希望日程	人数	%
第1回(令和3年11月19日(金))	36	34.3
第2回(令和3年12月5日(日))	69	65.7
無回答	0	0.0
合計	105	100.0

年齢	人数	%
10代	3	2.9
20代	15	14.3
30代	32	30.5
40代	39	37.1
50代	12	11.4
60代	4	3.8
70代以上	0	0.0
回答しない	0	0.0
無回答	0	0.0
合計	105	100.0

性別	人数	%
男性	71	67.6
女性	33	31.4
回答しない	1	1.0
無回答	0	0.0
合計	105	100.0

現役, OB・OG	人数	%
現役	93	88.6
OB・OG	8	7.6
回答しない	4	3.8
無回答	0	0.0
合計	105	100.0

職位	人数	%
管理職	30	28.6
管理職以外	58	55.2
その他	12	11.4
回答しない	5	4.8
無回答	0	0.0
合計	105	100.0

属性情報

所属

医療関係者：31.5%
 大学や研究所関係者
 ：29.1%

特徴：自主的参加が圧倒的に多く、受講者の職種が研究系や医療系などの専門職的な階層へ移行している。

研修に参加したきっかけ(複数回答可)	人数	%
研修に興味があった(自主的に)	97	92.4
上司(会社、組織)からの指示	5	4.8
その他	3	2.9
回答しない	0	0.0
無回答	0	0.0

研修開催を知ったきっかけ(複数回答可)	人数	%
各種学会や所属組織等のメーリング・リスト	66	62.9
原子力安全技術センターのホームページ	30	28.6
原子力人材育成ネットワークのホームページ	6	5.7
その他	3	2.9
回答しない	0	0.0
無回答	0	0.0

所属(複数回答可)	人数	%
自治体職員	3	2.4
電力職員	9	7.1
メーカー職員	5	3.9
原子力防災業務関係者	0	0.0
科学コミュニケーター	3	2.4
実動機関職員(警察、消防、海保、自衛隊)	2	1.6
医療関係者(診療放射線技師や看護師や保健師を含む)	40	31.5
大学や研究所関係者	37	29.1
各種学会の学会員	14	11.0
国職員	0	0.0
その他	14	11.0
回答しない	0	0.0
無回答	0	0.0

基礎編：令和3年度成果の続き（事前と事後の評価効果検定）

ALAS	N	事前		事後		t値
		平均	SD	平均	SD	
傾聴の態度	68	29.37	4.37	30.31	4.59	-1.56
聴き方	64	29.52	3.82	29.58	3.34	-0.37

- ・ALAS（積極的傾聴態度尺度） t 検定により、「傾聴の態度」は有意傾向あり、「聴き方」は有意差なし。
- ・過去の数値と比較すると、令和3年度は事前の平均値がそもそも高い傾向があった。

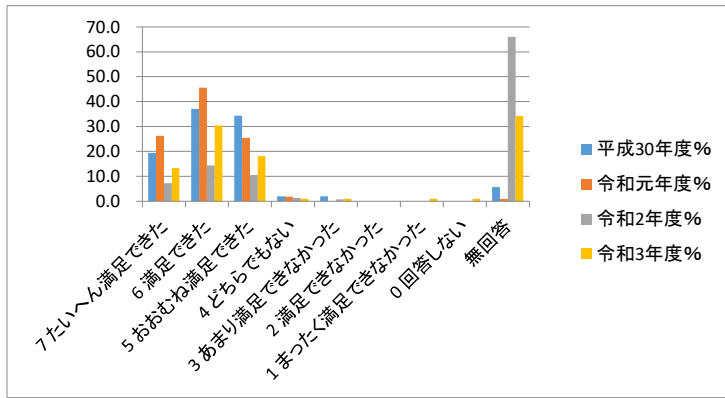
知識	N	事前		事後		t値
		平均	SD	平均	SD	
合計	75	6.97	1.71	9.11	1.09	-10.20 ***
1 一つの変異細胞が「がん」になるまでには、数年から数十年かかる。	79	0.77	0.42	0.94	0.25	-3.92 ***
2 100ミリシーベルト未満の低線量でもがんのリスクがゼロにならないとする「LNT仮説」は、物理学や生物学における観察結果も考慮して作られた。	79	0.51	0.50	0.75	0.44	-4.18 ***
3 人間に対する低線量放射線の影響を直接調べた疫学研究には、不確実な要素が伴うことが多く、その結果の信頼性は必ずしも高くない。	78	0.74	0.44	0.86	0.35	-2.00
4 放射線が切断したDNAの端と端を細胞がつなぎ直すということは、がんのリスクを下げる要因というよりは、がんのきっかけを作りうる要因である。	78	0.72	0.45	0.91	0.29	-3.97 ***
5 ある「がん」が発生した原因として放射線被ばくが関係しているのかどうかを、がんを調べることで推定することは、可能な場合もある。	78	0.32	0.47	0.85	0.36	-8.41 ***
6 科学的に解明されていないものに対して、一般的には、こわい、恐ろしいという気持ちが惹起される。	80	0.91	0.28	0.98	0.16	-2.30
7 リスク・コミュニケーションは、リスク認知を変えることが第一の目的ではない。	79	0.78	0.41	0.99	0.11	-4.14 ***
8 情報提供と共有は、リスク・コミュニケーションの一部である。	80	0.98	0.16	1.00	0.00	-1.42
9 専門家の課題として、自らの正しさに確信を持ちすぎていることがある。	80	0.78	0.42	0.96	0.19	-3.96 ***
10 「原子力」と「喫煙」のリスク比較は、ほとんど受け入れられない比較とされている。	78	0.42	0.50	0.85	0.41	-7.15 ***

*** $p < .001$

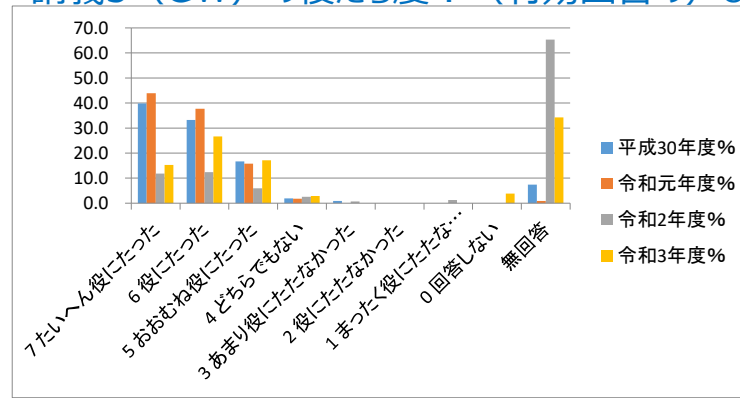
- ・放射線生物学と社会心理学に係る理解度質問 t 検定により、 $p = .001$ で有意差あり。

基礎編：令和3年度成果の続き（満足度や役たち度など）

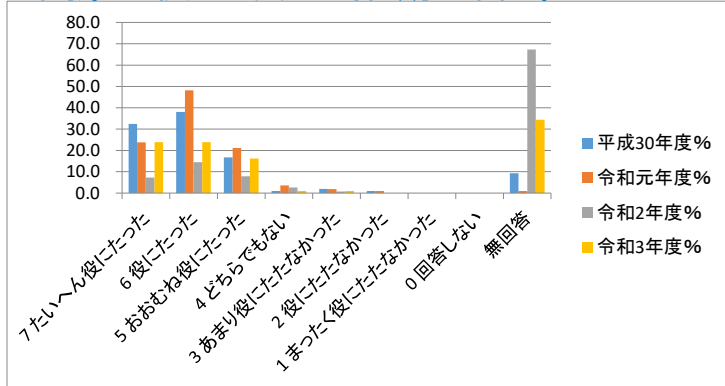
研修全般の満足度：（有効回答の）94.2%



講義3（GW）の役たち度：（有効回答の）89.8%

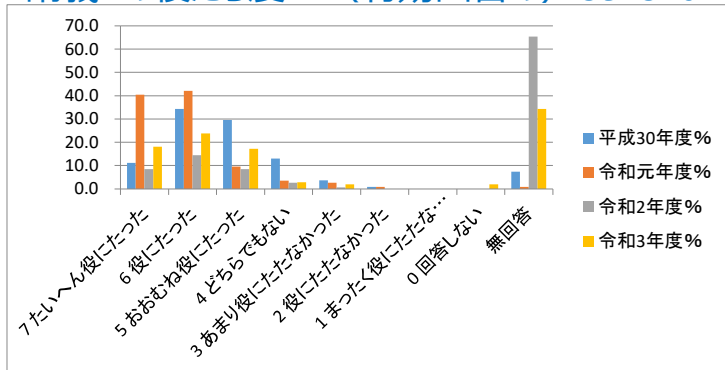


講義1の役たち度：（有効回答の）97.1%



開催方法	人数	%
1 Web形式がよい	38	36.2
2 対面形式がよい	8	7.6
3 どちらでもよい	23	21.9
0 回答しない	0	0.0
無回答	36	34.3
合計	105	100

講義2の役たち度：（有効回答の）89.8%



研修内容を活かせるリスク・コミュニケーションの主な場所（複数回答可）	人数	%
1 職場での住民などへの対応	42	19.5
2 自宅や職場の近隣の住民などへの対応	32	14.9
3 地域の集会・コミュニティなどへの対応	23	10.7
4 地域のサークル活動・講演などへの対応	13	6.0
5 施設見学で、職場をオープンにする際の住民などへの対応	22	10.2
6 原子力防災訓練時の住民説明	14	6.5
7 原子力緊急時の地域住民への対応	20	9.3
8 ない	4	1.9
9 その他	8	3.7
回答しない	1	0.5
無回答	36	16.7

基礎編の満足度や役たち度は、90%近いかそれ以上であり、過去の傾向と同じく高止まりしている。

開催方法は、Web形式が定着しつつある。

基礎編：令和3成果の続き（出口戦略の検討に資する来年度有料化の提案）

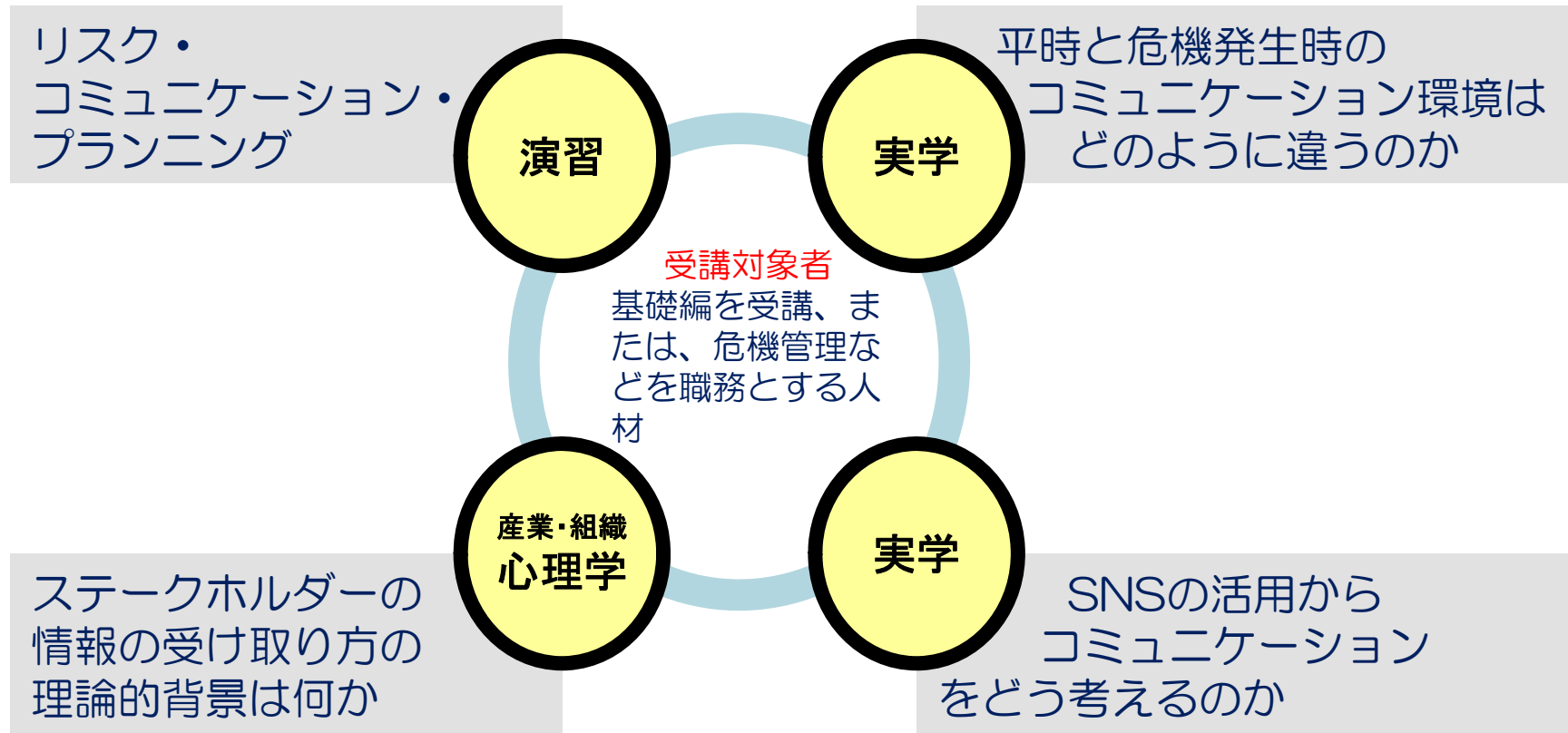
来年度有料	人数	%
1 基礎編は3～4万円程度であれば受講費用を負担することができる	4	3.8
2 基礎編は1～2万円程度であれば受講費用を負担することができる	21	20.0
3 基礎編は有料になったら受講費用を負担することができない	32	30.5
0 回答しない	12	11.4
無回答	36	34.3
合計	105	100

費用負担	人数	%
1 職場	12	48.0
2 個人	10	40.0
3 未定	3	12.0
0 回答しない	0	0.0
無回答	0	0.0
合計	25	100

- ・ 選択肢1（3～4万円） + 選択肢2（1～2万円） = 23.8%（無回答を除くと36.2%）であり、有効回答のうち30.4%が「基礎編は1～2万円程度」であれば受講費用を負担でき、その費用負担は48%が「職場」、40%が「個人」からとの回答であった。
- ・ （利益が確保できる）採算ベースである一人当たりの受講料単価は、「基礎編」3万円/名である。かつ、受講者140名/年以上を確保するとの前提がある。そのため、（利益が確保できる）採算ベースに遠く及ばない。
- ・ 自由記述からは一律有料化が様々な理由から困難であり、仮に有料化できても組織負担がかつWeb開催、1万円以内/名での受講料との意見に集約できる。

4. 実践編

「実践編」 以下4つの分野から構成



「実践編」の構成（令和3年度～令和4年度まで開催）

令和3年度実績

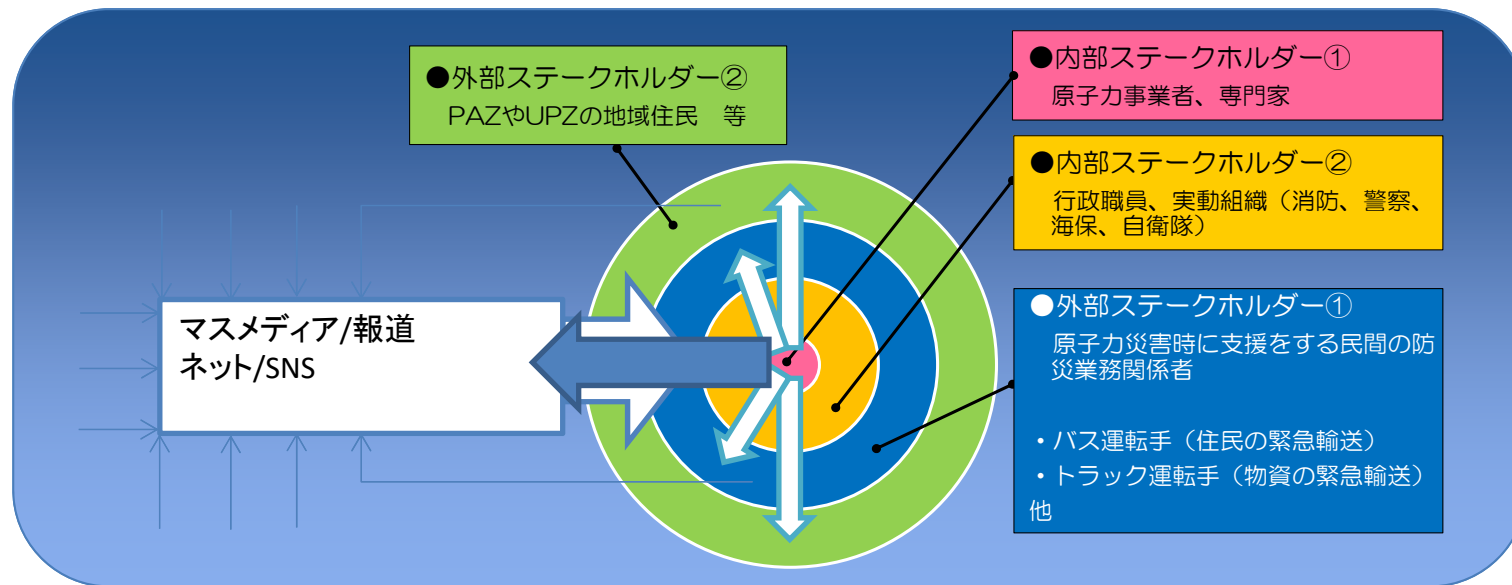
実践編

Web形式でのカリキュラム例：すべてZOOMリアルタイム研修（全1回/年）
令和3年12月18日（土）午前～午後【定員100名】

No.	形式	時間配分	題名	担当候補
-	通信テスト	09:30-10:00 (30分)	・ ZOOM接続テスト（受講者の参加は任意）	・ 事務局
0	開始	10:00-10:05 (5分)	・ 研修の進め方と留意点	・ 事務局
1	合同講義	10:05-10:45 (40分)	【産業・組織心理学】 ・ ステークホルダーの情報の受け取り方	・ 筑波大学
-	休憩	(5分)		
2	合同講義	10:50-12:00 (70分)	【実学】 ・ 危機管理対応時のリスク・コミュニケーション ～クライシス・コミュニケーション～	・ TAZAKIコミュニケーションコンサルティング
-	昼休	12:00-13:00 (60分)		
3	合同講義	13:00-14:10 (70分)	【実学】 ・ SNSを活用するコミュニケーション	・ 小野間委員
-	休憩	(10分)		
4	演習	14:20-15:50 (90分)	・ リスク・コミュニケーション・プランニング (バトルシップ・ゲームと振り返り)	・ 堀口委員

講義のねらい

- 緊急時 = 危機事象発生時において、コミュニケーションの環境が平時とどう変わるのかを理解し、準備につなげる。
- 危機発生時という“異常な”状況下において、ステークホルダーとのコミュニケーション = クライシス・コミュニケーションをできるだけ有効なものとするための意識と方法を理解し、準備につなげる。



- ❖ 緊急時に、全てのステークホルダーに効率良くコミュニケーションするためにはマスメディア/ネットの力の利用、協力を仰ぐことは必須。
- ❖ 一方、マスメディア/ネット情報をしっかりウォッチすることも重要。ステークホルダーの理解の反映でもあり、訂正、言い直し、繰り返し、追加、次の情報発信に活用する。

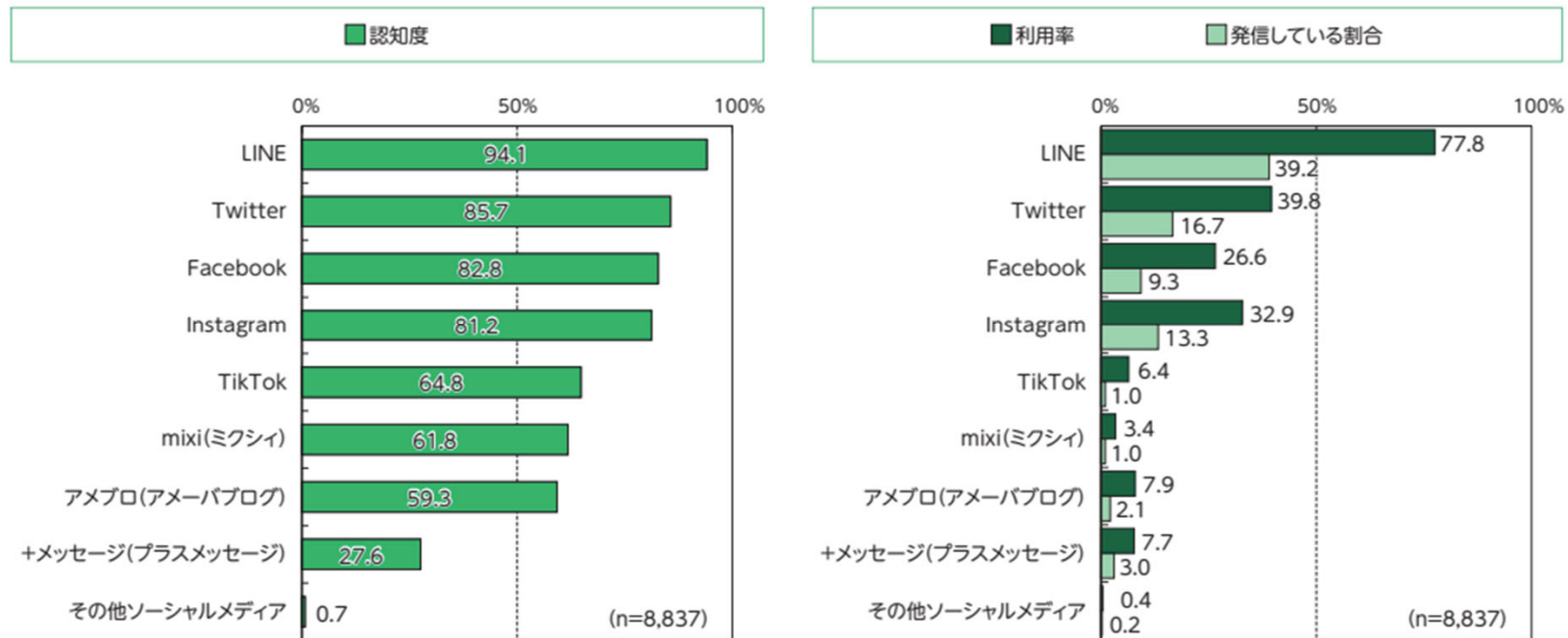
実学～クライシス・コミュニケーション

講義のねらい

情報発信についてSNSを使ってすべきか、しないべきか、その線引きとなるSNS活用のポリシーや留意点の全体的な話から、日本国内の主要SNS（Twitter、Instagram、Facebook、TikTok）の特徴に基づいたコミュニケーションの仕方を、①情報発信の内容、②デザイン、③拡散のポイントの3つの切口より説明し実践的な手法にも触れる。



- 認知度について、LINEは9割台。Twitter、Facebook、Instagramは8割台。
- 利用率は、LINEが圧倒的に高く8割弱、次いでTwitterで約4割、Instagramが3割強。
- 各種SNSで発信している割合は利用率と比べると半分以下。



出典: [2021年一般向けモバイル動向調査](#)

実学～SNSを活用するコミュニケーション

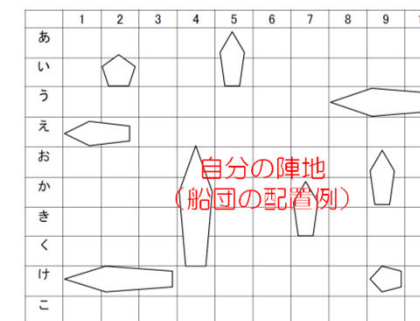
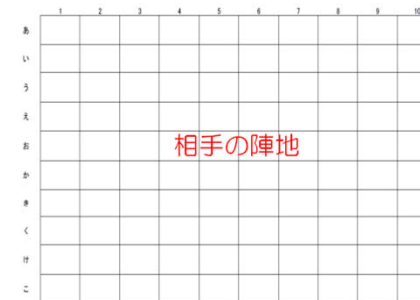
演習のねらい

- ・ゲームの目的：マス目に配置した相手の船団を全滅させること。
- ・リスク・コミュニケーション・プランニングの目的：危機管理において重要で体系的な情報分析の方法を、短い時間で理解すること。演習終了後、「どんなことを感じたか（演習中、演習が終わって）」、「演習中、何が起こっていたか（主な出来事、印象にのこっていること等）」、「この演習で何を学んだか」、「同時にくる情報を如何に体系的にまとめたか」及び「実場面の事例と関連付け」などについて2人1組で振り返る。

【実践編】演習の事前準備のお願い

メールに添付した以下2つの.pdfファイルから、

- ・「指示書（ルール）」のプリントアウト（紙への印刷）をお願いします。
- ・「マス目用紙」2枚のプリントアウト（紙への印刷）をお願いします。



演習～バトルシップ・ゲーム（Battleships Game）：Web形式で可能

○実践編（定員100人/回） 令和3年度成果

年齢	人数	%
10代	4	4.5
20代	15	16.9
30代	25	28.1
40代	29	32.6
50代	12	13.5
60代	4	4.5
70代以上	0	0.0
回答しない	0	0.0
無回答	0	0.0
合計	89	100.0

性別	人数	%
男性	59	66.3
女性	30	33.7
回答しない	0	0.0
無回答	0	0.0
合計	89	100.0

現役, OB・OG	人数	%
現役	78	87.6
OB・OG	7	7.9
回答しない	4	4.5
無回答	0	0.0
合計	89	100.0

職位	人数	%
管理職	22	24.7
管理職以外	49	55.1
その他	14	15.7
回答しない	4	4.5
無回答	0	0.0
合計	89	100.0

研修に参加したきっかけ(複数回答可)	人数	%
研修に興味があった(自主的に)	82	92.1
上司(会社、組織)からの指示	3	3.4
その他	4	4.5
回答しない	0	0.0
無回答	0	0.0

研修開催を知ったきっかけ(複数回答可)	人数	%
各種学会や所属組織等のメーリング・リスト	47	52.8
原子力安全技術センターのホームページ	35	39.3
原子力人材育成ネットワークのホームページ	4	4.5
その他	3	3.4
回答しない	0	0.0
無回答	0	0.0

所属(複数回答可)	人数	%
自治体職員	3	2.7
電力職員	3	2.7
メーカー職員	2	1.8
原子力防災業務関係者	0	0.0
科学コミュニケーター	3	2.7
実動機関職員(警察、消防、海保、自衛隊)	2	1.8
医療関係者(診療放射線技師や看護師や保健師を含む)	33	29.5
大学や研究所関係者	38	33.9
各種学会の学会員	14	12.5
国職員	1	0.9
その他	13	11.6
回答しない	0	0.0
無回答	0	0.0

属性情報の傾向は、基礎編と同じ

所属

大学や研究所関係者 : 33.9%、医療関係者 : 29.5%

実践編：令和3年度成果の続き（満足度や役たち度など）

研修全般の満足度：（有効回答の）98.3%

研修全般の満足度	人数	%
7 たいへん満足できた	17	19.1
6 満足できた	27	30.3
5 おおむね満足できた	15	16.9
4 どちらでもない	0	0.0
3 あまり満足できなかった	1	1.1
2 満足できなかった	0	0.0
1 まったく満足できなかった	0	0.0
0 回答しない	0	0.0
無回答	29	32.6
合計	89	100

講義1の役たち度：（有効回答の）100%

講義1「ステークホルダーの情報の受け取り方」	人数	%
7 たいへん役にたった	20	22.5
6 役にたった	25	28.1
5 おおむね役にたった	15	16.9
4 どちらでもない	0	0.0
3 あまり役にたたなかった	0	0.0
2 役にたたなかった	0	0.0
1 まったく役にたたなかった	0	0.0
0 回答しない	0	0.0
無回答	29	32.6
合計	89	100

講義2の役たち度：（有効回答の）96.7%

講義2「危機管理対応時のリスク・コミュニケーション～クライス・コミュニケーション～」	人数	%
7 たいへん役にたった	27	30.3
6 役にたった	15	16.9
5 おおむね役にたった	16	18.0
4 どちらでもない	1	1.1
3 あまり役にたたなかった	0	0.0
2 役にたたなかった	0	0.0
1 まったく役にたたなかった	0	0.0
0 回答しない	1	1.1
無回答	29	32.6
合計	89	100

講義3の役たち度：（有効回答の）88.4%

講義3「SNSを活用するコミュニケーション」	人数	%
7 たいへん役にたった	25	28.1
6 役にたった	17	19.1
5 おおむね役にたった	11	12.4
4 どちらでもない	6	6.7
3 あまり役にたたなかった	1	1.1
2 役にたたなかった	0	0.0
1 まったく役にたたなかった	0	0.0
0 回答しない	0	0.0
無回答	29	32.6
合計	89	100

演習の役たち度：（有効回答の）78.5%

演習「リスク・コミュニケーション・プランニング（バトルシップゲームと振り返り）」	人数	%
7 たいへん役にたった	11	12.4
6 役にたった	16	18.0
5 おおむね役にたった	20	22.5
4 どちらでもない	6	6.7
3 あまり役にたたなかった	3	3.4
2 役にたたなかった	0	0.0
1 まったく役にたたなかった	2	2.2
0 回答しない	2	2.2
無回答	29	32.6
合計	89	100

開催方法

開催方法	人数	%
1 Web形式がよい	38	42.7
2 対面形式がよい	5	5.6
3 どちらでもよい	17	19.1
0 回答しない	0	0.0
無回答	29	32.6
合計	89	100

研修内容を活かせるリスク・コミュニケーションの主な場所（複数回答可）

研修内容を活かせるリスク・コミュニケーションの主な場所（複数回答可）	人数	%
1 職場での住民などへの対応	37	17.2
2 自宅や職場の近隣の住民などへの対応	32	14.9
3 地域の集会・コミュニティなどへの対応	33	15.3
4 地域のサークル活動・講演などへの対応	24	11.2
5 施設見学で、職場をオープンにする際の住民などへの対応	15	7.0
6 原子力防災訓練時の住民説明	13	6.0
7 原子力緊急時の地域住民への対応	20	9.3
8 ない	3	1.4
9 その他	9	4.2
0 回答しない	0	0.0
無回答	29	13.5

実践編の満足度や役たち度は、有効回答の100%～78.5%と高い値を示しているが、ばらつきがある。

開催方法は、基礎編と同様にWeb形式が定着しつつある。

実践編：令和3年度成果の続き（来年度有料化の検討に資する来年度有料化の提案）

来年度有料	人数	%
1 実践編は5～6万円程度であれば受講費用を負担することができる	1	1.1
2 実践編は2～3万円程度であれば受講費用を負担することができる	17	19.1
3 実践編は有料になったら受講費用を負担することができない	35	39.3
0 回答しない	7	7.9
無回答	29	32.6
合計	89	100

費用負担	人数	%
1 職場	6	33.3
2 個人	6	33.3
3 未定	6	33.3
0 回答しない	0	0.0
無回答	0	0.0
合計	18	100

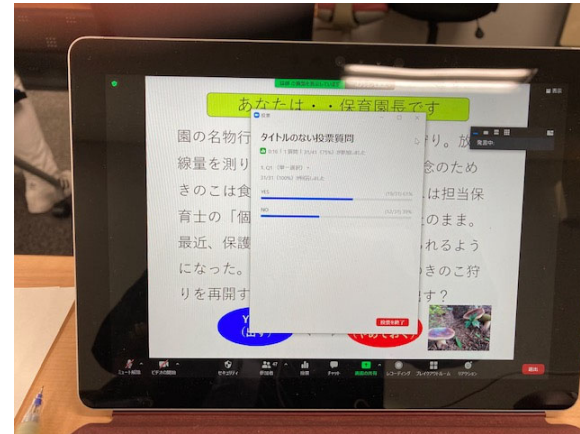
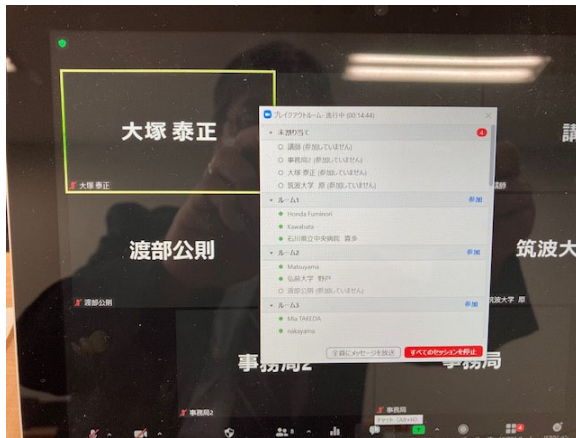
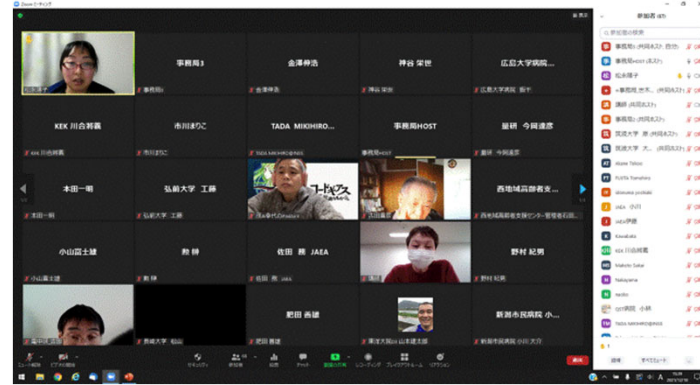
- ・ 選択肢1（5～6万円） + 選択肢2（2～3万円） = 20.2%（無回答を除くと30.0%）であり、有効回答のうち28.3%が「実践編は2～3万円程度」であれば受講費用を負担でき、その費用負担は30%が「職場」、30%が「個人」からとの回答であった。
- ・ （利益が確保できる）採算ベースである一人当たりの受講料単価は、「実践編」5万円/名である。かつ、受講者100名/年以上を確保するとの前提がある。そのため、（利益が確保できる）採算ベースに遠く及ばない。
- ・ 自由記述からは一律有料化が様々な理由から困難であり、仮に有料化できても組織負担がかつWeb開催、2万円以内/名での受講料との意見に集約できる。

5. 令和3年度成果の集約

- ①受講者の所属：平成30年度は「電力職員」が40%程度で突出して高かった。令和3年度は「大学や研究所関係者」と「医療関係者」が各々30%程度である。年度を重ねるごとに、受講者が研究系や医療系などの専門職的な階層へ移行している。この背景には、ステークホルダーの裾野が拡大し、Web形式への移行に伴う全国的なネットワークのつながりがあると考えられる。
- ②Webシステムの改良により、アンケートへの無回答率を、令和2年の70%程度から、令和3年度の35%程度へと引き下げることができた。
- ③令和3年度の研修全般の満足度は、無回答者を除く有効回答では「基礎編」で94%を超え、「実践編」で98%を超えた。
- ④令和3年度「基礎編」ALAS（積極的傾聴態度尺度）は有意傾向を示したものの有意差はなかった。同じく「基礎編」放射線生物学と社会心理学の理解度は $p < .001$ で有意に上昇した。
- ⑤令和3年度「実践編」の演習（リスク・コミュニケーション・プランニング）の役たち度は、無回答者を除く有効回答者では78.5%であった。他の講義の役たち度は90%～100%を推移しており、演習に関しては今後のコンテンツやカリキュラムの改善に向けたさらなる飛躍が期待できる。
- ⑥令和3年度「基礎編」と「実践編」を合わせた自由記述の分類を右表に示す。有料化への意見がもっとも多かった。

「基礎編」と「実践編」を統合した自由記述の分類

分類no	分類	発言数	構成比率
1	事務局への意見	7	8%
2	講義全般への意見(意義)	19	20%
3	講義全般への意見(改善点)	17	18%
4	講義内容に対する質問	3	3%
5	グループワーク・演習への意見(意義)	7	8%
6	グループワーク・演習への意見(改善点)	15	16%
7	有料化への意見	22	24%
8	リスコミに関する主張	3	3%
自由記述 計		93	100%



ZOOMホストPC設置会場／筑波大学東京キャンパス（茗荷谷）の状況

6. 令和4年度「実践編」成果の速報

令和4年度実績

実践編

Web形式でのカリキュラム例：すべてZOOMリアルタイム研修（計2回/年）

第1回 令和4年12月7日（水）午前～午後〔定員100名〕

第2回 令和4年12月17日（土）午前～午後〔定員100名〕

No.	形式	時間配分	題名	担当候補
-	通信テスト	09:30-10:00 (30分)	・ ZOOM接続テスト（受講者の参加は任意）	・ 事務局
0	開始	10:00-10:05 (5分)	・ 研修の進め方と留意点	・ 事務局
1	合同講義	10:05-10:45 (40分)	【産業・組織心理学】 ・ ステークホルダーの情報の受け取り方	・ 筑波大学
-	休憩	(5分)		
2	合同講義	10:50-12:00 (70分)	【実学】 ・ 危機管理対応時のリスク・コミュニケーション ～クライシス・コミュニケーション～	・ TAZAKIコミュニケーションコンサルティング
-	昼休	12:00-13:00 (60分)		
3	合同講義	13:00-14:10 (70分)	【実学】 ・ SNSを活用するコミュニケーション	・ 小野間委員
-	休憩	(10分)		
4	演習	14:20-16:20 (120分)	・ リスク・コミュニケーション・プランニング（注） （施設敷地緊急事態に至る緊急事態シナリオと情報受発信）	・ TAZAKIコミュニケーションコンサルティング

注：令和4年度は、令和3年度の演習内容を変更した。

演習（令和4年度）のねらい

- ・原子力緊急事態の発生時に大事なものは、プラントの危機事象のコントロールと同時に、「関係する住民へ正しい情報を提供」することによって「緊急事態への防護措置を着実に行ってもらう」ことにある。
- ・いかに「的確に全ての関係する住民に情報を伝え」「情報が“伝わり”」「正しく行動してもらう」かということ。
- ・しかし、実際の事象発生時には、様々な要因によって住民への情報が発信者側の思うようには伝わらなかったり、また間違っ理解される事態が多々発生する。
- ・**情報提供、行動変容を的確に進めるためには**一方的な発信だけでは十分ではなく、その時々発生する住民側の疑問、誤解に対応・解決をしながら進めていかなければ目的達成に近づかない。
- ・**本演習では、自然災害と原子力事故事象発生という困難な状況下で、①どのような方法を取れば住民により良く伝わるか、また、そのためにはどのような事前準備ができるのかを検討し、②緊急の行動変容を伝達するにあたって、どのような疑問や誤解が住民の中で発生するか、どのような誤情報が流布するか、等について想定しながら、グループ討議を行う。**
- ・これらを通じて、実際の危機発生時に必要になるリスク・コミュニケーションの組み立て方（プランニング）について考えるきっかけとしていただく。

現行の行政職員などを対象にした原子力防災研修や訓練

- ・正しい法律（原災法など）
- ・正しい指針（原子力災害対策指針など）
- ・正しい計画（地域防災計画など）
- ・正しいマニュアル（原子力災害対策マニュアルなど）
- ・正しい役割（●●地域の緊急時対応など）
- ・正しい連携（各種の機能班マニュアルなど）
- ・正しい手続き（各種の通報様式など）、・・・など

一方、緊急時のリスクの現場では・・・

- ・発生事象への初期対応ミス
- ・事態の把握ができない
- ・TVでの偏向報道
- ・偽情報のSNSでの拡散
- ・一部市民の過剰反応発生
- ・停電などを原因とする通信障害
- ・殺到する問い合わせ、・・・など

プランニング演習～施設敷地緊急事態に至る緊急事態シナリオと情報受発信

○実践編（定員100人/回） 令和4年度成果

ZOOMリアルタイム参加希望日程	人数	%
第1回(令和4年12月7日(水))	40	49.4
第2回(令和4年12月17日(土))	41	50.6
無回答	0	0.0
合計	81	100.0

年齢	人数	%
10代	1	1.2
20代	7	8.6
30代	18	22.2
40代	33	40.7
50代	15	18.5
60代	4	4.9
70代以上	0	0.0
回答しない	3	3.7
無回答	0	0.0
合計	81	100.0

性別	人数	%
男性	49	60.5
女性	30	37.0
回答しない	2	2.5
無回答	0	0.0
合計	81	100.0

現役, OB・OG	人数	%
現役	67	82.7
OB・OG	7	8.6
回答しない	7	8.6
無回答	0	0.0
合計	81	100.0

職位	人数	%
管理職	25	30.9
管理職以外	36	44.4
その他	14	17.3
回答しない	6	7.4
無回答	0	0.0
合計	81	100.0

属性情報

所属

医療関係者：19.4%
 大学や研究所関係者
 ：26.5%

特徴：自主的参加が圧倒的に多く、受講者の職種が研究系や医療系などの専門職的な階層のまま推移している。

申込者の減少：実践編の受講は基礎編の履修を前提とした経緯あり。

研修に参加したきっかけ(複数回答可)	人数	%
研修に興味があった(自主的に)	68	84.0
上司(会社、組織)からの指示	3	3.7
その他	7	8.6
回答しない	3	3.7
無回答	0	0.0

研修開催を知ったきっかけ(複数回答可)	人数	%
各種学会や所属組織等のメーリング・リスト	32	39.5
原子力安全技術センターのホームページ	35	43.2
原子力人材育成ネットワークのホームページ	9	11.1
その他	5	6.2
回答しない	0	0.0
無回答	0	0.0

所属(複数回答可)	人数	%
自治体職員	0	0.0
電力職員	6	6.1
メーカー職員	7	7.1
原子力防災業務関係者	2	2.0
科学コミュニケーター	6	6.1
実動機関職員(警察、消防、海保、自衛隊)	0	0.0
医療関係者(診療放射線技師や看護師や保健師を含む)	19	19.4
大学や研究所関係者	26	26.5
各種学会の学会員	13	13.3
国職員	4	4.1
その他	15	15.3
回答しない	0	0.0
無回答	0	0.0

実践編：令和4年度成果の続き（速報）

研修全般の満足度：（有効回答の）93.2%

研修全般の満足度	人数	%
7 たいへん満足できた	19	23.5
6 満足できた	23	28.4
5 おおむね満足できた	12	14.8
4 どちらでもない	0	0.0
3 あまり満足できなかった	3	3.7
2 満足できなかった	1	1.2
1 まったく満足できなかった	0	0.0
0 回答しない	0	0.0
無回答	23	28.4
合計	81	100

演習の役たち度：（有効回答の）88.0%

演習「リスク・コミュニケーション・プランニング（施設敷地緊急事態に至る緊急事態シナリオと情報受発信）」	人数	%
7 たいへん役にたった	23	28.4
6 役にたった	23	28.4
5 おおむね役にたった	5	6.2
4 どちらでもない	2	2.5
3 あまり役にたたなかった	2	2.5
2 役にたたなかった	0	0.0
1 まったく役にたたなかった	1	1.2
0 回答しない	2	2.5
無回答	23	28.4
合計	81	100

来年度有料：（有効回答の）17.2%は、実践編2～3万円程度なら負担可能

来年有料	人数	%
1 実践編は5～6万円程度であれば受講費用を負担することができる	0	0.0
2 実践編は2～3万円程度であれば受講費用を負担することができる	10	12.3
3 実践編は有料になったら受講費用を負担することができない	36	44.4
0 回答しない	12	14.8
無回答	23	28.4
合計	81	100

7. 出口戦略の検討

人材育成の**制度設計の観点**から、以下に指摘事項を特記する。

- リスク・コミュニケーターの**キャリアパス**若しくはコミュニケーターのプールを作っておいて、必要な場合に声をかけてリスク・コミュニケーションをするというような**制度設計**がないと今後、このような育成研修は定着しない。
- 育成研修を有料にするのであれば、**事業者や雇用者が費用負担**する若しくは事業者がコミュニケーターを**常時雇用**しなければならないような**制度設計**が必要である。
- 一般論として東京に近い組織は受講しやすいが、地方の組織は受講し辛くなるのを危惧する。安全性向上を担う人材育成に**地域格差**が生じることはあってはならず、**国が負担**すべき。

令和5年度以降の出口戦略は以下のとおり。

- 「**基礎編**」も「**実践編**」も**将来的な自立的普及**に向け、主に国を含む組織・団体からの大口ニーズによる企画・開催を目指す。
- 令和5年度以降も、**リスク・コミュニケーターのプール**（**会議体機能を含むコミュニティの場**）の提供・運用を継続する。

出口戦略ロードマップ

	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度以降～
育成目標	科学的知識、及び1対1での信頼性(ラポール)の形成法の習得			実学の習得に基づく合意形成に向けたアプローチの力量の向上		
◆研修名称	最新の社会心理学的知見を取り入れたリスク・コミュニケーター育成研修		原子力緊急時の地域住民への対応に備えるための平時におけるリスク・コミュニケーター育成研修		原子力緊急時に備えるリスク・コミュニケーター育成研修	
◆受講料	無料（国の支援アリ）					個々人の費用負担は困難
◆研修形式	対面式	対面式	Web開発	Web改良	Web運用継続	基本は対面式
基礎編カリキュラムの変遷						
行程表	◆イントロダクション ◆福島第一原発事故対応	・本研修のコンセプト／1F事故を踏まえた原子力防災上の教訓と反映 1F事故の概要			<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center;"> 自立的普及を目指す。 （組織・団体からのニーズにより企画・開催） </div>	
	◆放射線生物学	・低線量放射線生物学の基礎知識 ・がんのゲノムに残された放射線の爪痕(Radiation Signature)の発見				
	◆社会心理学の講義 社会心理学の演習	・リスク認知の仕組み／リスク・コミュニケーションの実践・成功事例 カルテットゲーム → クロスロードゲーム				
	◆臨床心理学の講義 臨床心理学の演習	・ラポール(信頼)の形成法とリスク・コミュニケーション グループワーク／ラポールを形成するための話の聴き方(傾聴)				
実践編カリキュラムの変遷						
◆産業・組織心理学				ステークホルダーの情報の受け取り方		<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center;"> 自立的普及を目指す。 </div>
◆実学(危機管理)				危機管理対応時のリスク・コミュニケーション ～クライシス・コミュニケーション～		
◆実学(SNS)				SNSを活用するコミュニケーション		
◆プランニング演習 (ゲーミング体験型)				バトルシップゲーム → 危機管理対応演習 リスク・コミュニケーション・プランニング		
リスク・コミュニケーターのプール構想（会議体機能を含むコミュニティの場）の提供・運用						
					プールの提供・運用	

令和4年度以降ご提案

基礎編

対面式でのカリキュラム例：令和4年度以降（定員50名/回）

No.	形式	時間配分	題名	担当
—	—	9:30-	受付	・事務局
0	開講	10:00-10:30 (30分)	開講、事前アンケート記入、イントロダクション	・事務局
1	合同 講義	10:30-12:00 (90分)	【放射線生物学】 ・低線量放射線被ばくと健康影響	・量子科学技術 研究開発機構
—	昼休	12:00-13:00 (60分)		
2	合同 講義	13:00-14:30 (90分)	【社会心理学】 ・リスク・コミュニケーションの実践（事例紹介）	・堀口委員
	演習		・リスク・コミュニケーション・トレーニング 「カルテットゲーム」	
—	休憩	14:30-14:40 (10分)		
3	合同 講義	14:40-16:10 (90分)	【臨床心理学】 ・ラポール（信頼性）の形成法とリスク・コミュニケーション	・筑波大学
	演習		・聴き方（傾聴）に関するグループ・ワーク	
4	閉講	16:10~16:30	事後アンケート記入、閉講、修了証の配布	・事務局

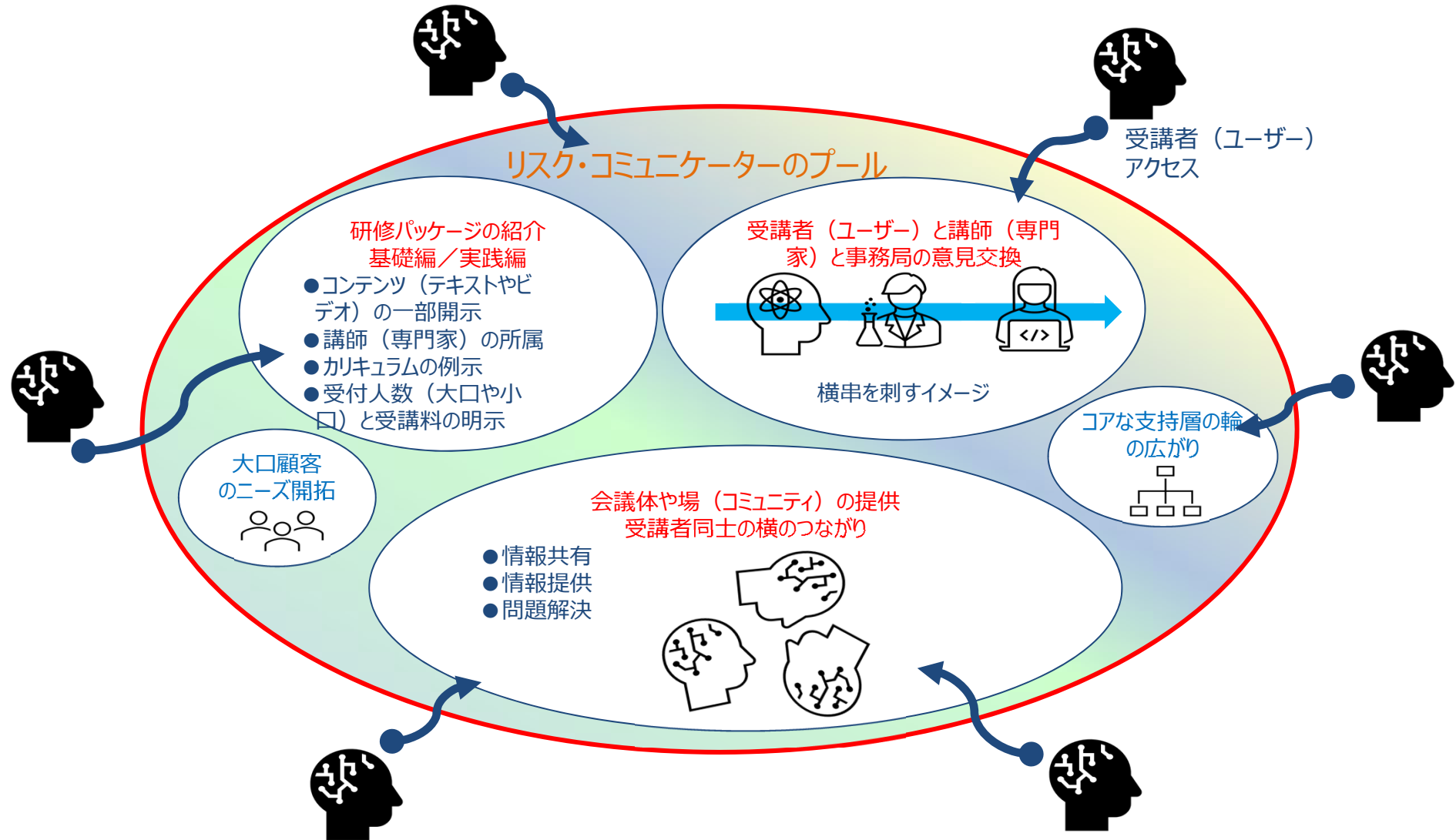
令和5年度以降ご提案

実践編

対面式でのカリキュラム例：令和5年度以降（定員50名/回）

No.	形式	時間配分	題名	担当候補
—	—	9:15-	受付	・事務局
0	開講	09:45-10:00 (15分)	開講、事前アンケート、研修の進め方と留意点	・事務局
1	合同 講義	10:00-10:40 (40分)	【産業・組織心理学】 ・ステークホルダーの情報の受け取り方	・筑波大学
—	休憩	(10分)		
2	合同 講義	10:50-12:00 (70分)	【実学】 ・危機管理対応時のリスク・コミュニケーション ～クライシス・コミュニケーション～	・TAZAKIコミュ ニケーションコ ンサルティング
—	昼休	12:00-13:00 (60分)		
3	合同 講義	13:00-14:10 (70分)	【実学】 ・SNSを活用するコミュニケーション	・小野間委員
—	休憩	(10分)		
4	演習	14:20-16:20 (120分)	・リスク・コミュニケーション・プランニング	・堀口委員 ・TAZAKIコミュ ニケーションコ ンサルティング
5	閉講	16:20-16:35 (15分)	事後アンケート、閉講、修了証の配布	・事務局

令和3年度以降、本事業の出口戦略を検討してきた経緯があるが、令和4年度以降は研修実施とともに出口戦略の一環として既存のWebコミュニケーション・ツール（Facebookを選択）を活用したリスク・コミュニケーターのプール構想の提供・運営を実施する。



令和4年度は、まずFacebookにてリスク・コミュニケーターのコミュニティを形成することから始める。

・アカウント名：リスクコミュニケーター研修 <https://www.facebook.com/risk.comm/>

このリスク・コミュニケーションのプールでは、主に以下の項目について、情報を提供・交換・調整しながら、コミュニティの輪を広げて行きます。

- 1) 過去の研修コンテンツや研修カリキュラム、講師陣に関する情報のご提供
- 2) 良好な（あるいは有効な）リスク・コミュニケーション事例や文献などのご紹介
- 3) 今後、研修開催が有料となる場合の内容や費用等に関するご提案とご相談

さらに、実際に事象や事故が発生した際、またはその可能性が高まった際には、このようなリスク・コミュニケーターのプールが存在しその人材を活用できることを、普段から周知しておく仕組みが必要であると考えています。

ご清聴、ありがとうございました。